

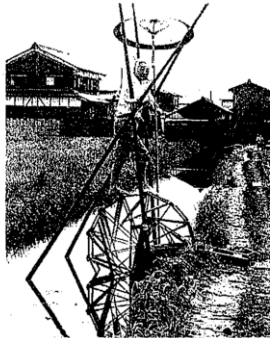
今昔物語

第1話

水車の思い出

今から約50年前、大東市の平野部、現在は住宅や工場、倉庫などが建て込んで御領を中心とした地域は一面の水田地帯で、縦横に走っている井路（水路）より高い所にある水田に灌漑用水をくみ上げるための水車（足踏水車）は、農家にとって必要不可欠な道具でした。

この水車の製作地として諸福地区が、府の水車生産の70%以上を占めていました。今でも北河内や中河内に保存されている水車をよく見ると「諸福〇〇」と焼印が押されているのを発見します。2反



御領3丁目付近で水車を踏み井路より田に水を入れる橋本さん（昭和40年ごろ）

（約二平方反）の水田に水を送るには、水車の羽根の先端部を3時間半ほど踏む重労働でした。また、畝田より灌漑するときには、踏んでいる水車の羽根にうなぎが、ひつかかったこともありましたと橋本實さん（御領3丁目・73歳）が当時を振り返り懐かしそうに話していました。

今昔物語

第2話

新田の牛舟

牛舟は、水冷式耕運機が普及する昭和30年以前に大東市域で新田地区のみに見られた牛を乗せて田畑に運ぶための舟です。

当時の新田地区は、田畑に牛を連れていくための橋と農道がなく、替わりに井路（水路）が網の目のようにはりめぐらされている水郷地域で、生活のための交通手段は、すべて舟に頼らざるを得なかったという土地の条件がこの特徴ある牛舟を産み出したといえます。

阪奈道路の八ヶ新田バス停近くにある森田實蔵さん（新田本町・79歳）宅のすぐ西側の



諸福小学校中庭に展示・保存されている牛舟（全長720cm・最大幅157cm）

井路（現在道路に変わる）に新田の方の人たちの牛舟の乗り場があったそうです。森田さんは、最初に牛を舟に乗せる時が大変で、近所の人に応援してもらい大人4人でいやる牛を2人が牛の前で左右の鼻輪を持ち、2人が牛の後ろで牛の尻尾を手に巻きつけたり、牛のお尻を押ししたりしながら牛を舟に乗せたものですと話していました。